

3 ヒアリング調査結果

鹿沼市立川上澄生美術館・北中学校

市立美術館と近隣中学校との連携**～美術鑑賞教室を通じた学校教育との連携の試み～****連携の経緯**

川上澄生美術館は「木版画の詩人」川上澄生の教え子でもあった、鹿沼市出身の長谷川勝三郎氏（1912～2001）からの約2,000点の作品提供により、1992年（平成4）に開館した。鹿沼市の旧市内を流れる黒川沿いに位置し、近隣には小学校や中学校が点在している。開館当初は全国的なPRを展開したが、その後知名度もアップし、地元に対してどのようなサービスを還元できるかを模索する中、学校教育との連携に着目し、平成16年度より市内の小・中学校に出向き木版画教室を実施するようになった。平成23年度からは、近隣の北中学校からの要請に応える形で、鑑賞教室を実施している。

**連携事例**

北中学校の美術の授業において、美術館の学芸員が作品の鑑賞方法をアドバイスしている。もともとは、北中学校の美術担当の教諭が、近接する川上澄生美術館へ相談したことから始まった。当初は学芸員と中学校の教諭が打合せをしたうえで、美術館所蔵の作品の中から適当な現代版画5～6作品を選んで持参し、学校で授業を行った。2回目からは、隣接している利点を生かし、美術の授業時間中に北中学校の生徒が直接美術館を訪れて鑑賞教室を行っている。

連携の形態

中学校の授業に、ゲストティーチャーとして美術館の学芸員が参加する。

**成果と課題**

- ・実際に、美術館に出向いて授業が行えるので、美術館から作品を持参する場合に比べて多くの作品を鑑賞することができる。
- ・この試みは緒に就いたばかりであるので、今後いかに継続させられるか、また、他の近隣校に波及させられるかが課題である。

その他

小・中学校の夏休み期間中には美術館に隣接する文化活動交流館の創作工房室を会場に、小・中学生向けの版画教室を開催するとともに、同期間中は市内の児童・生徒を対象に同館を無料で開放している。近隣の東小学校、東中学校、北中学校をはじめとする多くの小・中学生で賑わいをみせている。

二宮尊徳資料館・真岡市歴史資料保存館

二宮尊徳資料館、歴史資料保存館と学校との連携 ～郷土の歴史に親しみ、郷土愛を育む連携の実際～

真岡市二宮尊徳資料館・真岡市歴史資料保存館

真岡市は、江戸時代後期に二宮尊徳が仕法を行い、疲弊した農村を見事に復興させた地として有名である。二宮尊徳資料館は、真岡市物部地区にある二宮尊徳ゆかりの国指定史跡「桜町陣屋跡」に隣接し、尊徳の遺品等ゆかりの品々や尊徳の業績についての説明展示、映像による尊徳の紹介等を行っている。また、同地区内の旧物部小学校高田分校跡には、古い農具、民具などの民俗資料が保管・展示され、見学や体験ができる真岡市歴史資料保存館が設置されている。



〈二宮尊徳資料館〉

以下の事例は、近隣校に限った内容だけではないが、教育委員会が中心となって学校に施設の利用を積極的に促進している点、及び学校の利用に際し、地域のボランティアによる活動支援が行われている点等において、学校と施設のよりよい連携を図るための参考になるものとして掲載する。

連携事例

真岡市教育委員会では、同教育委員会が中心となって作成した小学生用社会科副読本「私たちの真岡市」に取り上げられている学習内容との関連から、市内の小学校に社会科見学等で両館の利用を促進している。また、両館とも地域のボランティアや嘱託職員による施設案内や学習支援の充実を図っている。

＜小学校の社会科の学習を中心とした施設との連携＞

社会科副読本「私たちの真岡市」には、小学3年生の学習内容に「古い道具と昔のくらし」が取り上げられている。実際に使用さ



〈真岡市歴史資料保存館〉

れていた道具（農具や民具）にふれる機会として、真岡市歴史資料保存館への社会科見学を実施している。ここでは、ボランティア（二宮郷土史同好会のメンバー）による農具や民具の使い方等の説明や実際に展示物を使った体験学習が行われている。

同じく小学4年生の学習内容「真岡の発てんにつくした人々」には「二宮尊徳」が取り上げられている。二宮尊徳資料館では、

嘱託職員による館内展示資料及び桜町陣屋跡説明・案内等の学習支援を行っている。

＜社会科及び総合的な学習の時間での調べ学習への対応＞

二宮尊徳資料館は休館日を除き随時開館、利用料も無料であり、近隣の小学生を中心に、資料や展示物の閲覧や解説等による支援を行っている。

連携の形態

主として学校行事等で実施されている社会科見学の実施とその協力、及び両館の利用促進という形での連携が行われている。

窓口は、学校側は学年主任等の企画担当者、歴史資料保存館は真岡市教育委員会文化課文化財係、二宮尊徳資料館は当直の嘱託職員または真岡市教育委員会文化課文化財係が担当している。利用時の展示物の説明や資料の提供等を、二宮尊徳資料館では嘱託職員が、歴史資料保存館では地域のボランティア団体（二宮郷土史同好会メンバー）が行っている。



＜二宮尊徳資料館展示品（リーフレットより）＞

成果と課題

- 市では各校にバスを割り当て、両館の利用に当たっての援助を行っているが、時間や天候により、予定された学習内容に影響が出るケースも否めない。その点近隣校は徒歩で来館できる距離であり、学校側の都合や天候等にも合わせて利用することができる利点がある。また、二宮尊徳資料館は総合的な学習の時間や社会科等の調べ学習にも利用でき、放課後等に来館する近隣校の児童が増えている。
- 二宮尊徳資料館は桜町陣屋跡に隣接しており、ここを訪れることは、児童にとって地域の歴史にふれるよい機会となっている。また、展示資料を自分の家から提供したという児童もあり、地域の施設としての親しみや地域の歴史への関心を高めることにつながっている。
- 教科の学習内容に関連して、利用は小学校3,4年生が主であるが、それ以外の学年にも利用を拡大していきたいと考えている。そのために、学校や市民に向けて、両館の広報の強化を図っていく必要性を感じている。また、教員対象の研修等により、両館の理解及び利用の工夫等についての認識を深めることも効果的であると思われる。
- 現在、歴史資料保存館には当直の職員が配置されておらず、利用希望を受けたときに市教育委員会が開錠している。また、両館とも事前の打合せは、日程の調整が主であり、学習への支援はほぼ決まった形となっている。学習の充実を図るため、効果的な学習形態や学習方法等について助言できる専門職員（学芸員等）の配置が望ましいが、人材の確保、人件費等の問題がある。

小山市立豊田公民館・豊田北小学校・豊田南小学校・豊田中学校

豊田公民館と近隣小・中学校との連携

～ふれあい楽習他の事例をとおして～

連携の経緯

小山市において、学校週5日制に社会教育関係機関（公民館）としてどう対応していけるか、青少年に対する生涯学習の機会の提供はいかにあるべきか検討し、平成12年から豊田公民館における「ふれあい楽習」が始まった。平成25年度で、12年目になるが、「地域と学校をつなぐ」視点から「ふれあい楽習」は継続して行われている。

連携の窓口

豊田公民館の窓口は、社会教育指導員が担当している。歴代の社会教育指導員は、地域や学校をよく把握している近隣小学校の校長退職者や近隣中学校勤務経験者である。学校の窓口は、教頭や教務主任である。年度初めには、公民館担当者が学校へ出向き直接顔を合わせて、情報の共有を行いながら、事業の説明や協力依頼をしている。

連携事例

1 「ふれあい楽習」の趣旨

学校ではなかなか体験できない活動を体験する（「地域を知り・地域にふれる」）、子どもたちが未来を担うのにふさわしい（「地域を語れる」）大人に育てて欲しいという願いを込めて実施している。

<子ども陶芸教室>

小学校4年生以上を対象にした教室と中学生を対象にした教室をそれぞれ実施している。中学生は、手芸工芸部の部員が積極的に参加している。各5回の教室の中で、間の3回は小・中合同開催のため、異校種間交流の場となっている。講師は地元在住の陶芸家をお願いしている。作った作品は、公民館祭りで展示し、地域の人に見ていただき好評を得ている。



<親子天体教室>

小山市立博物館の「ほっしー号」・天文教室ボランティアの協力を得て、豊田中を会場に実施している。対象は、豊田地区内幼稚園児・小学生・中学生、保護者である。



＜家庭教育学級・思春期講座＞

2校の小学校では、毎年家庭教育学級を実施している。中学校では、家庭教育学級と思春期講座を隔年で開催している。テーマや講師は、公民館と学校とで毎回相談して決めている。会場は各学校で、計画・運営等は公民館が担っている。



2 標語募集（地域安全活動連絡協議会主催）

地区内の4年生以上の全小・中学生が、標語を作り応募している。また、近隣の小山西高校や地域住民からも募集（自由応募）している。募集や審査などで近隣小・中学校の協力を得ており、最優秀作品は立て看板にして、学校や思川駅、公民館に掲示している。

3 豊田地区小・中学生絵画展

平成25年度で28回目を迎え、三世代に繋がる豊田地区ならではの絵画展である。各小・中学校から作品の応募と教職員の審査員の協力を得ている。公民館を拠点に活動する油絵サークル「イーゼル」の会員の作品も一緒に展示している。「イーゼル」の作品は、中学校の文化祭にも出品展示している。



4 豊田地区芸能交換会

芸能が盛んな豊田地区で行われている「豊田地区芸能交換会」は、平成25年度で36回目を迎える。豊田公民館を中心に活動するサークルのメンバーが出場するが、こうした地域の行事が中学校の講堂を会場に行われている。学校が地域の方々が集う場となっている。

募集チラシなどの配布物は、各学年やクラスごとに仕分けをして依頼し、教職員の負担のないように心がけている。また、お金のかかる事業の申込みは直接公民館で集めるようにしている。依頼だけでなく、事業実施後には必ず結果の報告をしている。

成果と課題

- ・公民館と学校が近隣にあり、直接会って話ができるので、情報の共有が円滑に行える。
- ・互いの施設や備品の貸し借りが容易であり、人的協力も互いによく行えている。
- ・親子を対象にした講座の実施や公民館に子どもの作品を展示することで、日頃、公民館に来たことのない大人にも、公民館を知ってもらうことができた。
- ・円滑な連携の結果、地域文化の掘り起こしが可能になり、地域に元気が出てきた。
→「新編豊田音頭」歌詞を62年ぶりにリニューアルし、DVD化した。
- ・今あるよさを継続していくための繋ぎ手（後継者）の確保。
- ・学校や公民館の担当者が人事異動等により変わっても、これまで積み上げてきたことが継承されるようにすること。

矢板市立図書館・矢板中学校

矢板市立図書館と近隣中学校との連携**～矢板市学校図書館等職員協議会を核とした取組について～****矢板市学校図書館等職員協議会**

矢板市立図書館は指定管理者制度を導入し、2008年4月1日から指定管理となった。

小・中学校の利用を増やし、図書館からも積極的に学校に働きかけていくためには、学校図書館司書教諭や図書事務員などを通して、学校との関わりを深めていく必要がある。そのためには学校教育課との連携が不可欠であると考え、矢板市立図書館館長と担当者を中心に、生涯学習課長と担当者、学校教育課担当者、各小・中学校図書館司書教諭及び司書補助員（図書事務員）で構成される「矢板市学校図書館等職員協議会」を平成24年4月に立ち上げ、図書館と学校相互の連携及び協力を強化していくこととした。

**連携事例**

図書館の近隣校である矢板市立矢板中学校は、積極的に図書館を利用している学校の一つである。図書館の担当者と、中学校の学校図書館司書教諭が窓口として、連絡を取りながら活動を進めている。

- 1 年に2回（5月と2月）開催される「矢板市学校図書館等職員協議会」に学校図書館司書教諭が参加している。
 - 【5月】図書館の事業計画の説明、学校での読書活動にかかわる取組の説明
 - 【2月】学校における読書活動にかかわる取組の結果（進捗状況等）報告、図書館の次年度の事業計画の説明
- 2 図書館主催の図書館専任講師による研修会（25年度から）に、司書教諭や図書事務員が参加している。
 - 【6月】児童図書の選書と企画展示の状況
 - 【10月】ブックコート及び修理の仕方
- 3 学校で積極的に図書館の本を借りるように、図書館で購入する本の選定に、司書教諭や図書事務員が関わっている。
- 4 総合的な学習の時間の調べ学習を、図書館で書物やパソコンを使って行っている。今年度も、86名の生徒が参加した。
- 5 図書館から司書教諭有資格者を派遣し、図書事務員の補助、ブックコートの補助、図書購入助成金の相談、情報交換等を行っている。
- 6 図書館の館長や担当者が学校に出向き、校長や図書事務員、学校図書館司書教諭に要望等を直接聞くなどの聞き取り調査を行っている。

成果と課題

- ・図書館が、学校図書館司書教諭や図書事務員と情報交換等をしやすい関係を築くことができ、密に情報交換が行えるようになった。
- ・学校の団体貸出の本の冊数が増えた。
- ・図書館の取組が、学校に徐々に浸透してきている。
- ・図書事務員対応の研修は少ないので、図書館主催の研修をもっと増やしていきたい。

那須塩原市厚崎公民館・那須塩原市立埼玉小学校・共英小学校・厚崎中学校
「学社連携・融合事業」を進めた厚崎公民館の取組

連携の経緯

「学社連携・融合事業」は、平成9年頃より黒磯地区の7公民館で取り組まれてきた。平成17年の黒磯市、塩原町、西那須野町の合併により那須塩原市となり、現在は、那須塩原市内の15公民館において取り組んでいる。現在、3つの公民館で『学社連携・融合推進会議』を年に1～2回実施している。その1つが、那須塩原市厚崎公民館である。

連携事例

1 「厚崎地区学社連携・融合推進会議」

会議の中心は、公民館・学校関係・自治公民館団体等の情報交換会となっているが、地域各団体と学校からの事業・行事等の呼びかけ、依頼の場ともなっている。

なお、会議の構成メンバーは、小・中学校教員（教務主任や学社連携担当）、高校教員、小中高PTA会長、保育園・幼稚園の代表、民生委員、主任児童委員、子ども会・育成会長、自治公民館長、家庭教育オピニオンリーダー、地域の交番所長、公民館長となっている。

2 「公民館事業」

〈あいさつ運動啓発ポスターコンクール〉

小・中学校の児童・生徒によるポスターコンクールを実施し、優秀作品を掲載した年間カレンダーを作成して、管内全戸に配布している。毎年カレンダーが届くことを楽しみにしている家庭も多い。なお、「あいさつ運動」は、平成25年度協働のまちづくり事業として位置付けられ、あいさつ看板設置事業も厚崎地区車座談議運営委員会が主体となって、自治会・子ども会により実施されている事業である。

〈ふれあい交流会（平日開催）〉

地域の高齢者と地区内小学校4年生、幼稚園年長、中学校生徒会、高校生ボランティア部等との異年齢集団交流の機会となっており、体験活動等をとおしての心の交流であり、情操教育や地域に愛着をもつ子どもの育成にもつながっている。

成果と課題

- ・年度当初に、地区の様々な立場の方と顔を合わせてスタートできるため、コミュニケーションを通してネットワークづくりができる。
- ・公民館からの事業活動の呼びかけ（依頼）の場とすることができる。
- ・会議開催通知に、「地域・学校等それぞれの現在課題となっている内容を持ち寄ること」を依頼しているため、会議では地域課題や学校課題の一端をお互いに把握することができる。
- ・会議に参加する全ての地域団体・学校が、課題等を準備してくれるわけではないため、会議を活性化させるところまではいかず、会議の持ち方については課題がある。
- ・予算的措置やマンパワーの不足により、事業は踏襲となり、新しいことが進められない状況にある。

足利市学社連携連絡会議の取組

足利市の特徴

足利市には17の公民館がある。(表1)市内11の中学校、22の小学校数と比較しても公民館数が多いことが分かる。しかも公民館と学校が隣接しているところが多い。各公民館にいる学級講座担当者は、足利市学社連携連絡会議の担当者にもなっている。「公民館だより」に学校の行事や人事異動が掲載されるなど、公民館(地域)と学校のつながりが強い。

(表1) 足利市内の学校と公民館

ブロック	中学校	小学校	高校・特別支援学校	公民館
A	協和中学校 愛宕台中学校	梁田小学校 久野小学校 筑波小学校 御厨小学校	足利南高等学校	梁田公民館 久野公民館 筑波公民館 御厨公民館
B	坂西中学校	坂西北小学校 葉鹿小学校 小俣小学校		三和公民館 葉鹿公民館 小俣公民館
C	第一中学校 第二中学校	けやき小学校 青葉小学校	足利女子高等学校	織姫公民館
D	第三中学校	東山小学校 桜小学校	白鷗大足利高等学校	助戸公民館
E	毛野中学校 富田中学校	毛野小学校 毛野南小学校 富田小学校	県立足利特別支援学校	毛野公民館 富田公民館
F	北中学校	北郷小学校 大月小学校 名草小学校	県立足利中央特別支援学校	北郷公民館 名草公民館
G	山辺中学校	山辺小学校 南小学校 矢場川小学校		山辺公民館 矢場川公民館
H	西中学校	三重小学校 山前小学校		三重公民館 山前公民館
合 計	11	22	5	17

足利市学社連携連絡会議の経緯

昭和62、63年の資料に「学社連携会議研究」の記述があり、そこから継続して行われてきたのではないかとの一説がある。足利市の教育目標の具現化にむけて、先進的に学社連携に取り組んできたことが分かる。学社連携が、全国的に注目された平成7年に、市内の公民館職員、小・中学校代表教員が一堂に会して、学社連携とは何か、自分たちのところでは何ができるかを考える会議を行った。このときに市内を8ブロック(主に中学校区)に分け、公民館を中心に学社連携会議をブロックごとに行うようになった。

足利市学社連携連絡会議の内容

主催は、栃木県教育委員会安足教育事務所と足利市教育委員会である。各ブロックごとに、公民館を中心に会議を開催している。趣旨は『学社連携・融合の視点に立ち、学校教育と社会教育が相互に補完し合い、より高い学習効果を生み出すための基盤づくりを進める』である。

会議の参加対象は小・中・高・特別支援学校教職員、社会教育関係職員等となっており、年に2回開催している。1回目は5月～7月までに各ブロックで決定し、2回目はふれあい学習ネットワークと合同で実施している。

学社連携連絡会議を単独で行っているのは、B・Cブロック（表1）である。Bブロックは葉鹿公民館、Cブロックは織姫公民館がそれぞれ主体となっていて行っている。他のブロックは、社会教育振興委員会で合同で行っている（6月以降）。ここでは、足利市学社連携連絡会議を単独で行っている2ブロックのうち、葉鹿公民館の取組について簡単に説明する。

足利市学社連携連絡会議（坂西地区の例）

平成25年度は葉鹿公民館の会議室を会場に、「平成25年度第1回坂西地区学社連携会議」という名称で、4月5日（金）に行われた。新年度が始まり慌ただしい時期であろうと考えられるが、この坂西地区では取組が定着化し、担当公民館職員が4年目で会議に慣れているため、会議はスムーズに行われている。時間は1時間弱として、要点を絞って行っていることも注目すべき点である。そのため会議は、足利市教育委員会生涯学習課職員が司会を行わないで、公民館職員が進行している。

内容については、その年の行事や事業の情報交換、広報や募集等の協力依頼と連携できる事業の話合いなどである。この会には教務主任が多く参加するため、教員同士の顔合わせの場としても役に立っている。公民館と学校の関係ができていることで、場所の貸し借りや公民館からの講座のお知らせがスムーズに行われている。また、公民館職員と教員の関係が築かれている一例として、公民館でそば打ちの講座を企画していると、そば打ちが得意な教員がいると情報提供があり、実際に教員が講師になったことがある。また、公民館で苦労している点として「人集め」、学校の支障となっている「予算の確保」が挙げられるが、お互いが補充しあって講座や行事を行っている。具体的には「坂西中合同講演会」がある。葉鹿・小俣・三和公民館と一緒に開催することが位置づけられており、学校に意向を聞いて公民館が講師選定をして、予算を出し、学校は保護者を中心に人を集めている。

成果と課題

- ・学社連携連絡会議により、互いに顔の見える関係づくりができた結果、事業を行う際、企画の段階から公民館が学校に入り、公民館と学校が連携しやすくなった。
- ・学校ボランティア出前市等を行ったことで、地域の人材を教育活動に生かしている学校もある。
- ・学校や公民館が主体になって、学社連携連絡会議を開催していないブロックについては、市生涯学習課が中心となり、他のブロックの情報提供や児童・生徒や教職員への効果を公民館や学校に伝え、今後、主体的に開催できるように計画している。

「アスネットねぎし」による「地域密着型教育」の取組

「地域密着型教育」は、学校・家庭・地域社会がこれまで以上に連携、協力し、家庭や地域社会の願いや意見を取り入れた学校運営を推進することで、学校教育の質の向上を目指すものである。PTA、青少年生活指導協議会、児童委員、社会福祉協議会、交通安全協会、児童館など、子どもとかかわる活動をしている人たちが共通理解を深め、協働・実践することにより、「①よりよい教育環境、支援体制が整えられる ②子どもたちの、ふるさとに対する誇りと愛着を育む ③明るく活力あるまちづくりに貢献する」等の効果が期待できる。

平成25年度は「地域密着型教育」の導入から6年目をむかえ、新たに推進校の18校が加わり、八戸市内公立の全72小・中学校で実践している。先進校では、教職員・保護者・地域住民の代表からなる「地域学校連携協議会」を設置し、保護者や地域住民の願いを学校教育に反映させ、家庭・地域社会の教育力（人材・施設など）や地域の特色を生かした教育活動が充実するよう話し合いがもたれている。また、学校教育の質の向上を図る手立てとして「ボランティアの活用」を推進している。校外学習の付き添い、本の読み聞かせ、調理実習の補助、学校行事の補助、環境整備活動など、ボランティアによる支援によって安全な活動が保障されたり学習環境の質が高められたりしている。さらに、ボランティアとのふれあいを通して、子どもたちは感謝や思いやりの気持ちをもち、心の成長にもつながっている。

昭和17年に、三戸郡下長苗代村から八戸市に編入したが、地域住民の根岸地区への思いが強い。子ども会活動がさかんで、3世代同居の家庭も多い。現在、地区には小学校2校（児童数増により根岸小から日計ヶ丘小に分離）、中学校1校あるが、3世代とも根岸小卒業という住民が比較的多い。

「アスネットねぎし」は、八戸市根岸地域住民のボランティア組織の総称である。根岸地域は、平成5年ごろから自主的なボランティアグループの活動が活発になってきている。「明るく活力のある住みよい街づくり」を目指し、既存の30程の活動推進団体や自主グループが一つのネットワークに入り、活動を一層容易にするために、根岸公民館が地域ボランティア活動の推進・連絡・調整の役割を果たしている。



根岸公民館

八戸市内24公民館の中で、講座数・来館者数が最も多い。生涯学習が推進され、地域の教育力の高さがうかがえる。公民館職員は非常勤職員で、すべて地域をよく知る地元の住民である。館長は前根岸小校長であり、平成25年度で勤務9年目になる職員は、地域住民で、根岸小の学校支援ボランティアコーディネーターも兼務している。「アスネットねぎし」の事務局は公民館にある。



連携の経緯

八戸市ですすめている「地域密着型教育」や「学校支援地域本部事業」を始める以前から、根岸地区にはそのベースとなるものがしっかりあった。青森県では、それぞれの学校に、できる限り学校支援コーディネーターを校内に配置する形をすすめてきたが、根岸小では、それまでの支援体制の延長線上で公民館に置くことを選んだ。根岸公民館職員が学校支援ボランティアコーディネーターとして、学校からの依頼を一括して受けている。コーディネーターは2人いて、もう1人は元PTA会長が務めている。連携体制としては、学校側の窓口は教頭が行っている。

この地域の特色として、「地域学校連携協議会」を学校ごとではなく、地区の3校合同で年3回開催している。2011年の震災を契機に、児童生徒の命を守るためには、地区3校が危機管理で別々の対応をしていたら地域住民が困ると考え、このような形になった。また、連合町内会長など3校で委員をお願いしたい人材の取り合いにならずに済む。この協議会が、連携できる顔合わせや情報交換の場としても有効である。



連携事例

- 1 郷土学習資料室（歴史民俗史料室）を開設し、案内を実施している。

「アスネットねぎし」の「郷土学習資料室運営委員会」のグループが中心となって、昔、根岸地域で使用していたもので、現在も残っている生活用具や農・漁具等を地域住民の協力を得ながら、約500種、1,000点を収集し、八戸市立根岸小学校の2室に展示している。この収集整備は平成8年から開始し、平成9年9月から地域住民に開放している。



主な活動は以下のとおりである。

- (1) 農・漁具等の収集活動を引き続き実施している。(随時)
- (2) 児童の社会科学習や総合学習等の時間に、「民俗史料ガイドグループ」が説明や生活用具・農具などを使って体験学習を行っている。
(米づくり学習で、足踏み脱穀機や唐箕を使用するなど)
- (3) 平成11年5月に「根岸言葉諺辞典」を作成し、郷土学習資料室に展示し、総合的な学習の時間などで活用している。
- (4) 平成12年12月に、根岸言葉による「郷土カルタいろは四十八選」を小冊子にまとめた。カルタを制作し、カルタ遊びを通して、根岸の文化・歴史を学んでいる。
- (5) 平成13年12月に、残したい地域の屋号と屋印(焼き印)を調査し小冊子にまとめた。郷土学習資料室に展示し、地域住民のふるさと探訪の参考にしている。



2 地域の小学校(2校)・中学校(1校)の児童・生徒の学習活動支援

「アスネットねぎし」の「ふれあい体験学習グループ」や「芸能伝承グループ」等が学校からの依頼により、児童・生徒の学習活動支援を行っている。

主な内容は以下のとおりである。

- (1) 竹馬乗りや竹とんぼづくり・お手玉遊びなどの指導
「昔の遊び伝承グループ」
- (2) 縄ないやぞうりづくりなどの指導
「わら工芸伝承グループ」
- (3) 豆しとぎやよもぎ餅づくり・ばほり餅づくり・
手打ちそばづくり及び漬物づくりなどの指導
「昔のおやつづくりグループ」
- (4) 根岸音頭や八太郎おしまこ踊りの指導
「芸能伝承グループ」
- (5) 根岸地域の昔語りの実施「民俗史料ガイドグループ」



3 根岸公民館と一体となり、活発な活動の展開

- (1) 家庭教育学級の講座では、児童・生徒たちとの交流会で、人生経験の話合い等を行っている。(年20回程度開講)
- (2) 広報誌として「公民館だより」を毎月発行、地域の各家庭に配布し、「アスネットねぎしの活動」や「地域の情報」を広報している。



成果と課題

- ・地域の諸団体や機関の結びつきが強固になることによって、地域が一体となった子どもの育成に取り組むことができた。
- ・子どもは、地域の方々へ尊敬や感謝の念をもち、地域の方々は、子どもたちから生きがいや活力を得られた。
- ・ボランティアの高齢化やより多くの人材の発掘、後継者の育成が課題である。

青森県八戸市立大館公民館・八戸市立新井田小学校・松館小学校・大館中学校
「学社連携・融合」を進めた大館公民館の取組

大館地区

昭和33年に大館村から八戸市に編入したが、今でも独立した地域の意識が残っている。八戸地方を代表する民俗芸能の「八戸えんぶり」の組（チーム）が、大館地区には7組もあり、子どもを大事にする地区であることが分かる。地区内に新興住宅地ができ、地区内の新井田小は、八戸市で2番目に大きな学校となった。子ども会行事は、子どもが減ってしまった所は、新興住宅街にある大きな子ども会と合同で実施するなど工夫している。

連携事例

（1）新田城まつり（H25.10.6 土 実施）

大館地区内の新興住宅街では、若い世代での町内会の加入率が低い状況にあった。そうした地域を含め、地区を一体としようとして実施したのが「新田城まつり」である。平成25年度に9回目を迎え、小学校（2校：全員参加）、中学校（1校：有志）、地区住民が参加する地区で一番の祭りである。3校の校長を始め、多くの教職員も参加・協力している。八戸市の後援を得ているが、地区住民が立ち上げ、運営委員として皆がかかわり開催している手づくりの祭りである。

（2）各種講座

各種講座（家庭教育学級、公民館活動教室、その他の機関との講座）の内容は、地域のことを中心に長いものになると、10年くらい続いている。小学生を対象にした講座が多い中、中学生を対象にした「地域ゼミナール」は、中学生と地域の方がまちづくりについて意見交換するもので、放課後に公民館を会場に行われた。この他、「中学校へ行こう」「大館中学校合唱コンクール鑑賞」「大館中学校立志式見学」は、中学校へ行く機会がなくなってしまった地域の方に好評である。

非常勤職員である公民館長が、3代続けて校長経験者であった。また、現公民館長までの館長全員（8名）が地域の人でもある。上記の事例（1）「新田城まつり」では、事務局は大館公民館にあり、事務局長は館長が務めている。情報発信・諸連絡・祭り関連講座の開催等の役割を担っている。また、事例（2）「各種講座」は、実施主体が公民館と学校の共催が多く、実施場所は各学校や公民館、関係機関で行っている。講座の事前打合せは、公民館職員が学校に出向いて行っている。

成果と課題

- ・子どもたちが、地域の豊かな自然や郷土芸能などを学ぶ機会が増え、地域に関心を持ち、地域の方とつながりができ、地域の一員であることの自覚と地域への理解が育っている。
- ・公民館職員は「地域づくりの拠点」としての意識を持ち、さらに、学校・保護者・地域の三者間での関係を強化できるような活動を多く考えていきたい。

青森県八戸市立柏崎公民館・八戸市立柏崎小学校・第三中学校
青森県立八戸盲学校・八戸聾学校

「子ども」を対象にした講座の実施

連携事例

柏崎公民館は、市の中心部にあり、近隣に柏崎小学校、第三中学校、八戸盲学校・八戸聾学校があり、各学校種に沿った内容の連携を実施している。

連携体制としては、学校側の窓口は教頭、ボランティア関係はコーディネーター（校内の一室にある地域連携室にいる）が行っている。公民館長は、「地域密着型教育推進事業」に理事としても参画している。また、学校の職員等（校長・教頭・生徒指導担当・PTA役員）も地区連合町内会や諸団体の一員として、各種会議や活動に参加している。公民館長は、「学校だより」や「公民館だより」等にて連携事例の情報を発信している。また、子どもを対象とした講座の案内・通知は、学校を通じて配布している。

（１）柏崎小学校

公民館講座を柏崎小学校で実施している。児童は、通い慣れた学校を会場にしているので、保護者の送迎を必要とせずに参加できる。内容は、「読み聞かせ教室」などである。他に、公民館を会場にした講座「夏休み工作教室」「柏崎音頭の踊り練習」「子どもヒップアップ講座」「パソコンで年賀状作り」を実施しているが、どの講座も人気が高い。

また、2年生が「生活科：町たんけん」の授業で柏崎公民館を訪問した際には、施設の見学やインタビュー、防災グッズの体験を行うなど、協力している。

さらに、公民館長は安全パトロール協議会の事務局長を務めていて、柏崎小学校の下校指導に参加している。

（２）柏崎小学校・第三中学校・八戸盲学校・八戸聾学校

公民館主催事業の「公民館文化祭」には、児童・生徒の作品を展示している。また、公民館だよりに、出品した児童・生徒の名前をすべて掲載している。

（３）第三中学校

第三中学校を避難所として、中学校と地域住民との合同防災訓練を実施している。生徒が自己の命を守り、かつ避難所の運営の支援にどのようにかかわることができるか、体験させている。公民館長は、地域自主防災会の事務局長を務めている。

（４）八戸盲学校・八戸聾学校

津波災害を想定した時の目的地として、柏崎公民館が避難場所になっている。

成果と課題

- ・連携により、各学校の特色や活動内容などが分かる。
- ・地域住民にとって、在校生がいなくても、各学校を自分たちの学校という意識を持つことができる。
- ・地域活動の中心メンバーが固定化し、高齢化が進んでいるので若返りが必要である。